

---

# 鈴アフター

ゲキガンガー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈴アフター

### 【NZコード】

N7841M

### 【作者名】

ゲキガンガー

### 【あらすじ】

鈴のアフターストーリーです。

(前書き)

鈴ルートのネタバレあります。ご注意ください。

あの事故から一ヶ月が過ぎた。

僕と鈴は皆のお陰で軽傷で済み、無事に退院することになった。

僕と鈴は別のクラスに編入することになった。

僕と鈴は恭介と真人、謙吾、リトルバスターZの皆のおかげで強くなることができた。

復学初日。

僕と鈴はクラスに入った。

クラスの皆には元気がなかつた。

「あら。棗さんではなくて？」

笹瀬川佐々美が尋ねた。

そうか、このクラスは笹瀬川さんのクラスなのか。

笹瀬川の周りには、三人の女子。彼女の取り巻きだろう。

「元気がないようですね」

「そうでもない。あたしは元気だ。さしこせさせい！」

鈴は明るい表情で答えた。

「笹瀬川佐々美ですか！あなた、わざと間違えているじゃなくて？」

「実はそうだ。よくわかつたな」

「きー！今見てらっしゃい」

その情景を見て、クラスの皆に笑みが戻った。

鈴は強くなつた。

僕が守るまでもない。

鈴は皆のお陰で強くなることができた。

ホームルームが始まるチャイムがし、クラスの皆は席に戻る。

担任の先生が入ってきた。

僕達のいつも通りの日常が始まろうとしている。

日常は特に変わらなかつた。

授業が始まり、授業が終わり、寮に帰り、食事をして、お風呂に入つて、宿題をして、寝る。

何も変わらなかつた。

それに欠けたものがあつたにせよ。

その行為自体に欠けたことはなかつた。

僕は校庭に出た。

そこには大きな樹が聳えていて、日陰に立つと涼しかつた。

この日陰でよく本を読んでいた少女のことを、僕はよく憶えていた。

一緒にハトに餌をあげて、サンドイッチを貰つたことを僕はよく覚えている。

僕は廊下を歩いていた。

そこには何もなく、ただ長い廊下が続いていた。

だけど、僕は憶えていた。

この廊下を僕の手をとり、賑やかに駆け抜け抜けていつた少女のことを。

僕は忘れなかつた。

僕は家庭科室に入った。

そこには和室があり、木製の丸テーブルがあつた。

僕は憶えていた。

僕はこの場で一人の少女と一緒にテスト勉強をしていたことを。

僕は校舎の外を歩いていた。

木々の木陰があつた。

その奥には、即席で出来たようなイスとテーブルがあつた。

僕は憶えていた。

数学の授業をサボり、一緒にお茶を飲んだことを。

僕は屋上に出た。

そして、思い出していた。

そこで、女の子と一緒にお茶を飲んで、星を見上げたことを。

僕は憶えていた。

僕は別の校舎へと繋がる廊下を歩いていた。

そうだった。

ここで、僕達リトルバスターズが再度結成されたんだ。  
あの時、僕が望んだ。

リトルバスターズの結成を。

僕は校庭を歩いていると、一木佳奈多にあった。

佳奈多は珍しくベンチに腰掛けていた。

「あら。直枝君じゃない。どうしたの？」

「一木さんこそ。珍しいね」

「私だって、たまには休む時もあるわ」

いつも通り素つ気無さのある態度だったが、いつもとはどこかが違う。

「少し、ここで休んでいたら?」

佳奈多は僕にそう訊いた。

その言葉に、僕は甘えることにした。

僕はベンチの空いている方に座る。

「……寂しいものね。片方がいなくなるといふことは……」

佳奈多は独り言のようにいった。

「葉留佳さんのこと?」

「……そうね。あんな奴いなくなればいいっていつも思っていたけど、いざになると、寂しさ以外に何も残らないわね……」

佳奈多にはいつも相手を気圧すような、威圧感はなかった。

「直枝君はどうなの、あいつがいなくなつて?」

「それは、寂しいし、悲しいよ。けど、そんなことばかりいってられないよ」

「強いのね。あなたは」

「言つて佳奈多は立ち上がつた。

「私は、あなたのようくはなれないわ」

そして、その言葉を言い残し、その場を去つた。

僕だつて、最初から強かつたわけじゃない。

皆のお陰で強くなれたんだ。

「棗さん。あなた、我がソフトボール部に入らなくて?」「体育の授業が終わり、佐々美は鈴にそう訊いた。

「なんだ? さしみ」

「笛瀬川さしみですわ」

「今、自分で間違えたな」

「とにかく。あなたには見所がありますわ。あなたならわたくしのライバルになる。そんな気がしますの。どうですの。ソフトボールやってみる気はなくて?」

「まあ、気が向いたらな」

鈴は言い残し、踵を返した。

「いい返事を期待していますわよ」

僕達の時は過ぎていつた。

皆がいようが、いまいが、僕達の時は過ぎていつた。

そして、時がすぎ、皆の傷も癒えていった。

強くなつた鈴が、皆を癒していった。

鈴は皆がいなくなつたことを感じさせないぐらい、鈴は氣丈に振舞つていた。

ある日。

授業が始まつても、鈴の姿はなかつた。  
一緒に登校したのだから、鈴は学校にきているはずだ。  
僕は先生に許可を貰い、鈴を探すことにした。

「鈴。探したよ」

鈴は屋上にいた。

フェンスに持たれかかるようにし、鈴は屋上から風景を眺めていた。

「どうしたの、鈴。具合でも悪いの？」

「いないんだな」

鈴は僕の問いかけに答えず、そういった。

「なあ、理樹。もう、皆いないんだな」

僕は答えらなかつた。

ただ沈黙している以外にななかつた。

「小毬ちゃんも。クドも。来ヶ谷も。美魚も。葉留佳も。真人も。  
謙吾も。恭介も」

鈴は振り返つた。

その瞳からは、涙が溢れ出ていて、くしゃくしゃになつていた。

「皆、もういないんだな……誰も、いないんだな」

鈴は膝を折つて、座り込むように倒れた。

僕は馬鹿だ。

鈴は強いと思つていた。

けど、それは間違つていた。

僕達は一人では弱い。

だから。

「鈴。僕がいる。僕がいるよ。誰がいなくても、僕はいる。僕だけ  
はいる」

僕は鈴を強く抱きしめた。

「……………そうだつたな。理樹がいたな…………」

鈴は、安心したかのように、そういう、泣き止んだ。

僕達は、一人では弱い。

だから、一人で生きて強くなつていくんだ。

時は流れていく。

誰にも、それは止めようがなかつた。

僕達も三年になり、そして、卒業することになつた。

僕は大学には行かず、就職することにした。

鈴を、守つていてからだ。

一人で生きていきたいからだ。

僕達は安いアパートを借り、そこに住むことにした。  
四畳程度の狭いアパート。狭いが、キッチンもあり、お風呂もあつた。

僕達は、そこで暮らしづけ始めた。

二人で暮らし始めた。

「理樹。 いつてらっしゃい」

鈴は出社する僕を見送る。

鈴が寂しがらないように、沢山の猫を飼つた。

これで、鈴が寂しがることもない。

「いつてくるよ。鈴」

「理樹。まつて」

鈴は僕を呼び止めた。

目には鈴の顔が大きく映り、唇には温かい感触が走つた。  
しばらく唇を交わし続けていた後、鈴は唇を離す。

「……いつてらっしゃい」

鈴は頬を赤らめていた。

僕達の時は過ぎていつた。

仕事は正直、きつかった。拘束時間も長くて、鈴と一緒にいられる

時間はあまりなかつた。

職場での人間関係には、色々と悩まされた。

だけど、これも鈴を守る為だつた。

辛い仕事にも、僕は耐えられた。

たまの休日には、鈴と一人で電車で出かけた。

鈴の好きそうな場所に、僕は連れて行つた。

楽しかつた。一人でいられることが。

何物にも代えがたかつた。

「理樹、先に入るな」

風呂を入れて、鈴は先に脱衣所に入り、服を脱ぎ始めた。  
狭い部屋で脱衣所にせよ、カーテンがかかつてゐるだけのもので、  
当然、鈴の服を脱いでいる音が否応なく聞こえてくるし、カーテン  
越しに鈴の体の影が見える。

僕も男なので、いやらしい想像も止めることはできない。  
パチイという何かが外れた音がした。

これは鈴がブラジャーを外す音のようだ。

スルスルと、布が抜けている音が聞こえる。

これは、鈴がパンツを脱いでいる音のようだ。  
つまり、鈴は今何も身につけていない状態。  
つて、僕は何考えているんだ！

煩惱を捨てる。

心頭滅却。心頭滅却。心頭滅却。

このままじゃ、僕は欲望を抑えきれない。

「理樹」

脱衣所から声がする。

鈴の声だ。

「一緒にに入るか？」

僕は吹き出した。

「な、なにいつてるんだ。鈴」

「あたしと入りたくないのか？」

「……そりや……入りたいけど……」

「あたしも、理樹と一緒に入りたい。一緒に入るう」

鈴は呆れるぐらいに素直に言った。

結局、僕達は一緒にお風呂に入った。

鈴の裸は綺麗だった。僕には勿体無いくらいに、鈴は綺麗だった。

鈴の髪を洗つてあげたり、鈴の背中を流してあげたり。

狭いお風呂だつたが、とても楽しかった。

それからも時は流れ。

僕達は、一人だけの日常を繰り返す。

僕が出掛ける前に、鈴は必ず僕にキスをした。

それは朝の行事と化していた。

僕達は傍目には、新婚に見えていただろう。

料理や洗濯、家事なども、鈴がこなすようになつていった。

最初は不器用で危なつかしくかつたけど、鈴は一生懸命にやつた。料理もそれなりに出来るようになつた。

昼飯は鈴の愛妻弁当になつた。

見た目はあまり良くなかったが、愛がこもつていた。

それから、僕は職場での昼ご飯が楽しみになつた。

夕飯は夕飯で、鈴が作っていた。

飼っている猫にもあげる為か、魚料理が多かつた。

「こら、スター・リン。テーブルの上にのぼっちゃダメだ。マルクスとフリードマン、喧嘩しちゃ、めー、だ」

鈴は猫を叱つた。恭介から習つて、猫には過去の偉人の名前をつけるようにしている。

僕達は食事が終わつたら、一緒にお風呂に入り、布団を一枚引き、一緒に眠つた。

僕達は明りを消し、寝付く。  
しばらく時間が過ぎた。

鈴の寝息が間近で聞こえる。

僕はまだ起きていた。

この状況で、何か起こらないのはおかしい。

僕だって男だ。

それなりに性欲だつてある。

けど、勇気はない。

そんなことをしたら、鈴に嫌われるんじゃないかって、そう思つてしまつ。

「理樹

しばらく時間が経ち、僕が眠れないでいると、鈴が僕の名前を呼んだ。

「あたしは理樹のことが好きだ。誰よりも、理樹のことが好きだ。だから、あたしが理樹に何をされても嫌いにならないと思つ。だから理樹」

鈴は逡巡の末、言つた。

「あたしのことを信じて欲しい

そして、鈴は僕の手を握つた。

僕は馬鹿だ。女の子にここまで言わせるなんて。

「僕も鈴のことが好きだ。世界の誰よりも、僕は鈴のことが好きなんだ」

僕は鈴の手を握り返した。

僕は起き上がり、鈴に馬乗りになる。

月明かりの下、僕は鈴の姿を見た。

パジャマ姿の鈴は、胸元がはだけていて、呼吸は荒かつた。

その澄んだ瞳は、僕をまっすぐに見つめていた。

「……理樹。はじめてなんだ。できれば、優しくして欲しい

「わかつた……。鈴。できるだけ、優しくする」

僕達は今までいくらいに激しく、唇を交わした。

それからまた時が過ぎる。

僕達の生活は変わらない。

二人で暮らし、一人で愛し合つた。

月日が過ぎて、僕達の生活に大きな変化が訪れた。

鈴が不調を訴え、病院に行つた。

診察の結果、鈴が妊娠していることがわかつた。

新たな生命の誕生。

家族ができるということだった。

僕達はそれを知つてからまもなく、籍を入れた。

「これであたしは、直枝鈴だな」

鈴は嬉しそうにそういつていた。

月日は流れ、鈴のお腹は大きくなつていった。

そして、出産の日が近づいていた。

僕は仕事を休ませてもらい、鈴と一緒にいた。

「理樹、男の子だったら名前はどうする?」

「そうだね……悩む、ね……」

「あたしは恭介にしようかと思う」

「……はは、それもいいかもね。女の子だったら?」

「小穂ちゃんにしよう」

いかにも鈴らしい発想だった。

僕は思わず笑つてしまつ。

「それで、あたしは理樹と、いつか、リトルバスターZが出来るく

らい子供を作りたい」

鈴はそう言った。

僕は頷いた。

僕達は幸せだった。

様々なのものを失つたけど。

失つたものを抱えて、僕達は生きている。

失ったものの中で、僕達は幸せを見つけている。

恭介。

僕と鈴は、幸せになつたよ。

きっと、これからも。いつまでも。

僕と鈴は幸せであり続ける。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7841m/>

---

鈴アフター

2010年10月17日02時17分発行